炭櫃

〔倭訓栞前編十二〕すびつ　炭櫃の義、炭取ともいふ、火函をいへり、

〔禁秘御抄上〕下侍

三間有炭櫃、四面敷畳、號侍臣亂遊所也、

〔枕草子一〕冬は、○略中ひるになりてぬるくゆるびもてゆけば、すびつ火をけの火も、ぢろきはひがちになりぬるはわろし、

〔枕草子二〕すさまじきもの　火おこさぬ火をけすびつ

〔枕草子十一〕雪いとたかく降たるを、れいならず御格子まゐらせて、すびつに火おこしてもの語などして、あつまりさぶらふ、

〔調度歌合〕一番　右　すびつ

埋火のぢたにこがるゝかひもなくちりはひとのみ立浮名哉

火桶

〔饅頭屋本節用集比財寶〕火桶ヒヲケ

〔類聚名物考調度十一〕火桶の畫樣

古き火桶の繪に常夏を書たる有り、俊明が家にも傳へもたる桐火桶は、後水尾院或は東福門院の命婦とも云ひ傳へたるにも、この蘿麥の繪を書たり、桐火桶の香爐もまた同じ繪樣なり、或人云、定家卿の歌に、霜さゆるあしたの原の冬がれにひと花咲るやまとなでしこ、といへる意にて、一花を火によせたるならんといへり、芭蕉翁の發句に、霜の後撫子さける火桶かな、とせしはまたく此意によれり、

〔三中口傳三〕一鋪設裝束事

火桶　帖上置之○略中

火桶幷燈臺事